

Pi-hio



el Vm

ノーベル賞 文学全集

NOBEL PRIZED
LITERATURE

後援

スウェーデン・アカデミー

ノーベル財団

This collection of
the Nobel Prizes in Literature
is edited under
the patronage of
the Swedish Academy and
the Nobel Foundation.

主婦の友社

ノーベル賞文学全集 13

ラックスネス
カミュ
アンドリッチ

訳者 山 室 静
渡 辺 守 章
鬼 頭 哲 人
栗 原 成 郎
山 口 琢 磨
大 久 保 敏 彦
清 水 徹
森 安 達 也
工 藤 幸 雄

授与演説および受賞演説の収録に際しては、集英社のご厚意を得ました。
カミュ「カリギュラ」「誤解」の収録に際しましては、日本における独占翻訳出版販売権を所有する新潮社のご厚意を得ました。

昭和47年2月5日 発 行

発 行 者／石 川 数 雄
発 行 所／株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台1-6
郵便番号 101

振 替 東京180番

電 話 東京294-1111(大代表)

印 刷 所／凸版印刷株式会社
製 本 所／寿製本株式会社

大口製本印刷株式会社

本文用紙／本州製紙株式会社

表 紙
ク ロ ス／日本クロス工業株式会社

製 函／凸版印刷株式会社

© 主婦の友社 1972 Printed in Japan

0397-522133-3062

編集顧問

川端康成

芹沢光治良

編集委員

高橋健二

佐藤亮一

白井浩司

山室 静

表紙装画

パブロ・ピカソ

装丁

原 弘

目次

ラックスネス

選考経過……シュル・ストレムベリイ……………	山口琢磨訳……………6
授与演説……エリアス・ウェセーン……………	山口琢磨訳……………10
受賞演説……………	山口琢磨訳……………13

原爆基地

人と作品……ステイングリムル・J・ソルステインソン……………	山口琢磨訳……………123
著作目録……………	山室 静編……………384

カミユ

選考経過……シュル・ストレムベリイ……………	大久保敏彦訳……………138
授与演説……アンダーシュ・エステルリング……………	清水 徹訳……………144
受賞演説……………	清水 徹訳……………146

カリギユラ

渡辺守章訳……………	151
------------	-----

誤解

鬼頭哲人訳……………	197
------------	-----

人と作品……ビエール・ド・ボワデッフル……	大久保敏彦訳……227
著作目録……	大久保敏彦編……386

アンドリッチ

選考経過……シエル・ストレムベリイ……	森安達也訳……248
授与演説……アンダーシュ・エステルリング……	工藤幸雄訳……251
受賞演説……	工藤幸雄訳……254

呪われた中庭……	栗原成郎訳……257
----------	------------

胴 体……	栗原成郎訳……309
-------	------------

困い者マール……	栗原成郎訳……319
----------	------------

オルヤツイ村……	栗原成郎訳……359
----------	------------

人と作品……ベタル・ジャジッチ……	栗原成郎訳編……367
著作目録……	栗原成郎編……391

肖像画／ミッシェル・コーヴェ……	4、136、246
カラーさしえ／ジュラール・エコノモス(ラックスネスの作品)……	32、33、64、65、96、97、112、113
フィリップ・フェルメル(カミユの作品)……	240、241
ロベール・アントワヌ(アンドリッチの作品)……	264、265、280、281、296、297

ハ
ル
ド
ー
ル
・
キ
リ
ヤ
ン
・
ラ
ッ
ク
ス
ネ
ス

一九五五年受賞（五十三歳）

（アイスランド 一九〇二）

原
爆
基
地



Hubert Lashley

ラックスネス

受	授	選
賞	与	考
演	演	經
說	說	過

ラックスネスに対する

ノーベル文学賞授与の選考経過

元パリ駐在スウェーデン大使館
文化参事官

シュル・ストレムベリイ

ストックホルムの知識人や文学者の間では、スカンジナビアの文学的遺跡の最も忠実な守護者であるアイスランドからノーベル賞受賞者が出ないことは、重大な見落としとは言わないまでも、一つの遺憾な空白と感ぜられていた。アイスランドはサガとエッダの国である。これらのヴィーキング時代の英雄的、教訓的、神話的な詩篇を集めた大作は、それらを生んだ大陸の北欧三国にあっては、キリスト教の影響の下で、その口碑さえ失われてしまっているのである。たとえばアイスランドでは、異教を奉ずる最後の(ケルト族の)吟遊詩人たちが沈黙してしまっただけで長い間、ケルト系の文学の伝統が維持されていたが、それと同じく、アイスランドは大西洋にうかぶ小島で、九世紀末期になって初めて植民が行なわれたところであり、欧州大陸の激動からまったく隔絶して存在してきたのである。こういう事情で、漁師と百姓のまばらな、貧しい社会にまじって住んでいた幾人かの文才にたけた人々は、平和のうちに、文学の保存という彼らの大事業を成しとげることができたのである。しかし、この大きな仕事で、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンで知られ、その正しい価値において評価されるようになったのは実に十七世紀になってからである。この時期以後、古風な特色を多数残しているために他の北欧各国の言葉といひじりしい違いがあったアイスランド語は、文学用語としてよりひんぱんに使用されるようにはなったが、この島の新しい支配者たるデンマーク人のより柔軟な言葉と、激しい競争をしなければならなかった。

一九五五年十月二十七日、スウェーデン・アカデミーがその年のノーベル賞を一人のアイスランドの作家に授与することを決定した時、才能、名声ともほぼ互角な二人の小説家から選択しなければならなかった。一人は五十歳になるハルドール・キリヤン・ラックスネスで、アイスランド語で書く作家であり、もう一人はそれより十二歳年上のグンナル・グンナルソンであった。後者はデンマーク語で書く作家であり、スカンジナビア各国にひろがった彼の読者の数は、前者よりはるかに多いのである。考えてみれば、アイスランド語は、わずかに十五万人という小さな民族によって話され、理解されているのみである。二人は、おのおの正式に推挙された。アカデミー会員の中には、賞をこの二人の候補者に分けるのがよいという意見もあったが、これは、一九一七年にデンマークの二人の作家、ゲレロフとボントビダンに賞が分かち与えられて以来、とられたことのないやり方であった。しかし一方、二人のアイスランドの作家について投票を行えば、自国語を駆使することによって傑出した大家の地位を得た作家が比較的容易に過半数の票を集めることは、疑う余地がなかった。かくしてハルドール・ラックスネスは「長い、名誉ある文学の伝統を承け継ぎ、あずかるもの」として賞を授けられることになった。もっとも、彼の作品の最も本質的な部分の一つには、彼にとって束縛と感じられるこの古い民族の伝統に対する意識的な激しい反発があるのである。そのほか、彼はまた、一九四八年以来、この古い母国語を名誉あるものにした努力によって全国民から尊敬されていた二人のアイスランド人——レイキヤヴィク大学の文学史担当教授シグルドゥル・ノルダル氏と、コペンハーゲン大学のアイスランド語及び同文学担当教授ヨーン・ヘルガソン氏——によって熱心な推薦をうけていた。このうちヘルガソン氏は有名な詩人である。

事実、ラックスネスは受賞をもう一年待たねばならなかったかもしれない事情があった。というのは、一九五五年には、もしその名が受賞者名簿に加えられたならば、ノーベル賞の声をひとときわ高からしめたと思われるほどの栄光に輝く競争者があったのである。それは大詩人、ポール・クロアデルで、彼はすでに八十歳を越えていたのである。すでに長い間にわたって候補者にあげられ、この年は特にスウェーデン・ペンクラブの推挙をうけていたので、彼の突然の死が——

ようど十年前のポール・ヴァレリーの場合のように——いまわの際にそれまでの許しがたい怠慢のつぐないをする機会を奪わなかったならば、アカデミーで大多数の支持をかち得たであろうことは十分あり得たことであった。

一九五五年には約十五名の候補者があげられており、その中で注目すべき人物には、フランスではアンドレ・マルロー、アルベール・カミュ、サン＝ジヨーン・ペルスがあり、英米系ではエズラ・パウンド、アルダス・ハックスレー、それに有名な歴史家G・M・トレヴェリアン(一九五三年の受賞者チャーチル卿の推薦)があり、さらに二、三のイタリアの抒情詩人、エウジェニオ・モンターレ、ジュゼッペ・ウンガレッティなどがあり、またギリシアの詩人イオルゴス・セフェリス(一九六三年受賞)も初めて候補に上った。

こういった事情で、ハルドール・ラックスネスが賞を勝ち得たのも、競争なしでは決してなかった。厳格な批評家であるペール・ハルストレームの起草した彼に関する最初の報告書は、芸術的観点から見た場合については決して好意的なものでなく、現実の政治的問題を扱った近年の作品に隠せない共産主義的傾向について、明白な留保条件をつけたものであった。一九四八年、はじめてノーベル賞候補にあげられた時、ラックスネスは、アイスランド人の独立回復のための数世紀にわたる闘いを描いた長編歴史小説『アイスランドの鐘』を完成したばかりであったが、彼の名を全北欧的なものにし、次いで世界的なものにしたのは、実は、三十年代に書かれた生氣あふれる小説『サルカ・ヴァルカ』だったのである。この小説は、厳しい自然と、日々の苦しい問題と戦わねばならない一人のアイスランドの少女を描いたもので、十カ国以上の国語に訳された。フランスに現れたのは一九三九年の春で、マルセル・アルランによる長い序がついており、彼はその中で、『まことに人間的な作品である。その興味の由来するところは、単なる異国情緒などという小さなものではない』と言っている。たしかにこの年の春は大事件が多すぎて、新しい外国の、しかもこのような遠隔な島から来た一人の作家を世に出すのに好適な時期ではなかった。この時、世界の列強は、避けられない新たな戦争に、日に日に近づきつつあったのである。この『サルカ・ヴァルカ』は戦後数年してから映画になり、再度世界を一周することになったが、ペール・ハルストレ

ームはそれでもなお消極的態度を示し、著者の「米軍のアイスランド軍事占領」に対する激烈な非難の書『原爆基地』さえ彼の意見を変えさせるに至らなかった。

ラックスネスの同国人と、スカンジナビアの他の諸国の文学諸団体の強い推薦を前にして、スウェーデン・アカデミーは彼の作品を再度検討してみることに決定した。このためアカデミーは、古代現代双方のアイスランド語に精通した二人の言語学者、つまり翻訳にたよることなく彼の作品の評価のできる人を選んだ。その間にラックスネスは、『ゲルフラ』を出版した。これは一種の「反サガ」であり、全く現代的に屈託のない姿で登場する古代の英雄たちが、人道をわきまえない海賊として扱われ、彼らの戦いや恋愛の華々しい行為が、スケールの大きな無頼の所業として描かれている。

二人の専門家のうちの一人、スヴェン・ヤンソン教授は、世界的に有名なルーン文字の学者であるが、ラックスネスはアイスランドのストリンドベリイであると言ひ、諷刺の激しさと力強い言語は、いかに忠実な翻訳を行なったとしても、その効果を減殺し、その特異な本質を変えてしまうものだと言ひ、彼は言っている、「ラックスネスにノーベル賞を授与するということは、サガの時代から形造られ、伝えられてきたアイスランドの偉大な叙事詩の伝統に敬意を表することになるのである。」

もう一人の専門家、エリアス・ウェセーン教授の意見も、積極性においてこれに劣らぬものであった。彼は一九四七年以来のスウェーデン・アカデミーの会員であるが、『改作されたサガ』ともいふべき『ゲルフラ』にさえ彼は、ラックスネスが母の乳とともにその精髓を吸いとったに違いない古代叙事詩の影が深く刻まれていると見るのである。また彼も同じく、アイスランド語を他の国語に良心的に翻訳することの困難、特にラックスネスのような大家の手によるものの翻訳には越えがたい困難があることを力説している。ウェセーンは確言している、「彼の功績は、アイスランド語を若返らせて、現代の思想や感情を表わすための芸術的手段に変形させたことだけではない。彼は、他の若いアイスランドの作家たちに、芸術的的目的のために母国語を使

1 ゲルマン民族が一、二世紀の間(キリスト教以前)に用いていた特別なアルファベット。

用する勇氣を与えたのである。」

結果においてスウェーデン・アカデミーはためらうことなくハルドール・グーズヨソン氏——またの名ハルドール・キリヤン・ラックスネス氏、これは父方の農場の名を借りたものだが——に一九五五年度ノーベル文学賞を授与することに決定した。授賞理由は「偉大なアイスランド叙事詩の様式を生まれかわらせた彼の輝かしい叙事詩的作品」に對して授与するというものであった。

ラックスネスの作品でフランス語に訳されたのは『サルカ・ヴァルカ』だけであるが、アメリカとソヴィエトでは彼の作品は多数翻訳されて、多くの読者を得ていたように思われる。フランスやアメリカの新聞に現われた数人の批評家による記事から察すると、スウェーデン・アカデミーは国際政治關係を考えなければならなかったように思われる。これらの批評家によれば、ノーベル賞がその真の意義から曲げられて、その偉大な過去が受賞者自身以外によく知られていないといったまったく地方的な文学を力づけるために利用されたと説明する以外に方法がないというのである。戰間的共產主義者であるラックスネスが受賞できたのは、結局、ジュネーヴで示したソヴィエトの微笑のおかげであるといえる。つまり、ロシアの新しい領袖たちはここではじめて、長い冷戦に雪解けの可能性をちらつかせたのである。

しかし、投票に先立つ討論の報告書を読めば、これほど根柢のない非難は考えられない。アカデミーの常任理事アンダーシユ・エステルリング氏は放送を通じて新授賞者を紹介するに当たり、ラックスネスの作品には、政治的発言によってゆがめられている部分があるかもしれないという留保条件を注意深く述べている。北欧諸国にあっては、一般の世論は、このソヴィエト追隨といういわゆる共產主義といわれるもの——ラックスネスはインタビュで明白にこれを否定した——のなかに、原始キリスト教の色合いと素朴な祖国愛の感情とがまじった一種の社会主義を認めただけであつた。それは、過去にデンマークから来た善良な圧制者と、現在アメリカから来ている保護者とを、ともに呪い罰しようとする類のものである。これに関連して思い出されるのは、フランスで放浪していた間にカトリックになっていたラックスネスが、彼の新しい宗教の熱烈な実践者であり、後にストリンドベリイとアメリカの若いプロレタリア文学——アプトン・シンクレアは

彼の思想の師であつた——の影響の下にきわめて急進的な政治思想をいだくに至つたことである。

もちろん、ソヴィエトのみならず全ヨーロッパにおいて、左翼各紙が、その仲間の一人に名譽が輝いたことを祝つたのは事実である。アイスランド共產党機関紙は受賞を祝つて、全世界が遂に「アイスランドが単なるアメリカの軍事基地であるのみでなく、この小さな島は現存する世界最大の詩人を生み出した」と書いた。「ラックスネスはゴリキー、ドライサー、ストリンドベリイ、アンナセン・ニクセー——彼らはノーベル賞を与えられなかったが——に比べられる作家である。ブルジョワ文学の審査委員会さえ、その急進的、社会主義的主張にかかわらず彼にノーベル賞を授与せざるを得なかったという事実が、何よりもその価値を立証するものである。」

左翼紙ではないアイスランドの一新聞は、この偉大なアイスランドの作家の文学的功績が正当に評価され報いられたことに對する満足をかきさなかつたが、その称讃の言葉はより控え目であつた。一方、レイキャヴィクの保守系の主要日刊紙「モルゴンフラーディド」は、「ラックスネス氏はその祖国の人々の生活を最も暗い色で描くため、長い間、営々としてそのペンを走らせてきたことを忘れることは困難である」と書いて、視野の広い国際世論の目から見れば、アイスランド国民に向けられた敬意と解釈されるべき一文学賞から儲けを引き出すとする共產党のしつこさを非難しようとしていた。

フランスでは、パリの大部分の新聞は、受賞者のいわゆる政治的側面に深く触れることなく、彼の経歴に関して書いただけであつた。『オーロール』紙は、ラックスネスはノーベル賞とスターリン賞とともに授けられた唯一の作家であることを書き、『コンパ』紙は、その年の授賞者選定にあたり、スウェーデン・アカデミーのつた自由主義的な不偏不党の立場を立証したことに讃辭を呈した。これに反して、『エクスプレス』紙は、紙面の左隅に近い欄で、アカデミーが地方の平凡な作家にこびるという純政治的ジエスチュアをとることによつて、ノーベル文学賞の将来を重大な危険におとしれたと非難した。『ルビュ・ド・パリ』紙は、本文の筆者の筆により、「偉大な文学の伝統を代表する優れた現代の作家」に讃辭を送り、「翻訳を通してさえも、彼の文体は、アイスランド語の原文のもつ海の塩水と野生の林檎

の味と、すがすがしさとを伝えうるものである。」と書いている。
フランス共産党の機関紙「ユマニテ」が無条件の讃辞を呈したのはいうまでもない。曰く「ラックスネス氏が受賞した日は、文学と、共産主義と、平和のための祝いの日にほかならず、記念碑により記憶にとどめられるべき日である。」

古代北欧語の大家、エリアス・ウェーセン教授は、ストックホルムでのノーベル賞授賞式典で、スウェーデン・アカデミーを代表して受賞者を讃える演説を行なった。彼の演説はなにもまして、この遠隔の島において数世紀にわたって欧州の他の国にその類を見ない文学を築き上げた、数少ないアイスランドの国民に対する敬意の表明であった。彼は述べている、「ラックスネス氏は、現代の社会的、政治的諸問題に全身でぶつかってゆきながら、祖国の文学の発展に古代の生氣あふる民衆的な力をとりもどせることに努力してこられました。この事實はしかも、氏が現代の世界に適應できるよう造りかえられた母国の言葉に極めて忠実であったことにより、氏を自国の国民から尊敬される国民詩人たらしめることを妨げることはできませんでした。」
演説を終えるにあたり、講演者は最も純粋なアイスランド語でアカデミーからの祝辞を述べ、国王グスタフ六世の手からこの高い報酬を受けとるよう進み出ることをうながしたのであった。

ストックホルム市庁で催された恒例の祝宴において、ラックスネスは完全無欠なスウェーデン語で返礼の演説を行ない、自分がサガの英雄の時代とエッダの詩の名も知れぬ先駆者の後の、影の薄い後継者にすぎないと述べ、それら古代の作物の最初の痕跡はスウェーデンの石に刻まれたルーン文学と、リヒャルト・ワグナーの四部作の最後の反響の中にすでに見えていたと付け加えることを忘れなかった。長い拍手をあげた彼の演説の結語部分をここに再録しよう。

「両陛下、

淑女、紳士各位、

スウェーデン・アカデミーが私の名を、名も知られぬサガの作者たちと並べることを敢えてされたということは、私の生涯の大事件であります。アカデミーがこのような高い名誉を私に授けられるについてあげておられる理由は、私の残った人生において大いに励ましになる

ことでありますが、同時にそれは、私の作品がいくらかの価値をもつに至るについて支持を与えて下さった方々に喜びをもたらすものであります。授けられた榮譽を考える時、私の心は誇りと喜びであふれんばかりであり、スウェーデン・アカデミーに対し、心からなる敬意と感謝を捧げるものであります。今日、国王陛下の御手から賞を受けましたのははしくも私個人であります。これは同時に、私の導き手たるアイスランド文学の伝統の父たちに贈られたものと感じているのであります。」
(山口琢磨訳)

1 一八六九—一九五四・デンマークの作家。熱烈な社会主義者で、その代表作「勝利者ベレ」によって世界的プロレタリア作家の名を得る。その他「人の子ディンチ」「赤いモルテン」など。

ラックスネスに対する

ノーベル文学賞授与に際しての歓迎演説

スウェーデン・アカデミー会員

エリアス・ウエセーレン

一九五五年十二月十日

陛下
閣下
淑女
紳士各位

アイスランドは北欧の物語芸術のゆりかごであります。そしてこの事実は、この国の特異な自然と、この国に独特な社会の発達に根ざしているのであります。アイスランドにおきましては、他の土地で特に中世にあって顕著となりました階級社会の発達——換言すれば教会と民衆、教養ある上流階級と農民といった対比が発生する諸条件が存在しなかったのであります。ここでは、書物は、他の国々とちがって、ラテン語を解する聖職者の特権ではありません。中世においてさえ、アイスランドでは、ヨーロッパの他の国々におけるよりはるかに広く、教育が一般の民衆の間にゆきわたっておりまして、このような事情があったからこそ古代の詩作が母国語で書き残されることができたのであります。我が国を含む他の北欧諸国では、それらは鼻先であらわれ、やがては忘れられてしまったのであります。

このさいはての小島に住む小さな、貧しい民族が、世界文学の一端をになうに足る文学を創造しえたのも同じ理由によるのであります。ここで生まれた物語文学は、幾百年にもわたってヨーロッパには

他に比肩するを見ないほどの価値をもつものであります。スノレその他のサガは、歴史的な物語文学の頂点をなすものとして、また明快で力強いスタイルの典型をなすものとして、今後も永く残るものであります。アイスランドのサガは大部分が作者不明のものであります。これは一つの民族の文学的な才能と創造的な力との産物なのであります。

アイスランドにあっては、サガは常に流行している読み物でありました。この国の人にとって、それは、貧しさと苦しさに満ちた暗い幾世紀の間、心の慰めであり、力を与えてくれるものであります。現代になってもアイスランドは、その人口とその才能とをあわせ考えれば、北欧において最も高いレベルをもつ文学的な民族であります。

このような偉大な伝統をもつ物語芸術を我々の時代に合うようにつくり換えるには、異常なエネルギーが必要です。農民詩人オーラフル・リョースヴィーキングルについて書いた本の中で、ハルドール・ラックスネス氏は特に詩作の問題と使命に触れて、作中人物の一人にこう言わせております。

「詩は、それが民衆の心に触れるものである時によい詩なのだ。ほかに基準などはない」

しかし民衆の心に到達するには、文芸的技法だけでは、それがいかに偉大であろうとも、十分ではありません。出来事を描写し展開する能力だけでは不十分であります。もし文学が「世界の光」であるべきものであるならば、それは人間の生命と人間の条件の真の姿を描き出すために闘うものでなければなりません。ハルドール・ラックスネス氏の作品には、そのほとんどすべてを通じて、このような思想が長くつながつた糸のように貫かれているのであります。これに加えて、人生の具体的な事柄に対する特別鋭敏な感覚と、物語作家としてのつぎることのない天分とが、ラックスネス氏を現代アイスランドの最大の作家たらしめたのであります。

近代文化生活のもつ葛藤——アイスランドのみならず広く西欧世界全体にわたる——に對して、もつとも注目すべき証言を与えた作品の一つは、『カシミールの偉大な織手』（一九二七）であります。これは、ラックスネス氏の最初の作品として、未だ未熟な点もありますが、現代の記録として、また個人的な告白として、大きな重さをもつもので

あります。主人公は若いアイスランド人であり、芸術家的気質をもつ作家であります。彼はヨーロッパを放浪する間に、第一次大戦に続く救いがたい混乱の根柢に触れる経験を経験します。かつてのハンス・アリーヌスのように、彼は人生の中に契りどころを見出し、新しい方向を見定めようとしています——ところが、なんと環境の変化でしよう。一世代以上の時間が彼らをへだてています。一方は、平和、進歩に対するゆるぎない信仰、それに美に対する夢があり、他方には、引き裂かれ血ぬられた世界、道徳の弛緩、苦悩、それに無力感しかありません。ステイン・エリズイはついにカトリック教会の懷に身を投ずることとで終わりをつづるのであります。ストリンドベリ以後の北欧の文学において、このような冷徹な真剣さをもって人間内部の相克をさらけ出し、個人の時代の力に対する反抗を描き出した作品は、実に数少ないのであります。

一九二〇年代の終わりに母国に帰って後にはじめて、ハルドール・ラックスネス氏はアイスランド民族詩人としての使命を見出し、芸術家として充足を得るに至りました。氏の作品はすべてアイスランドに主題を求めたものとなりましたのであります。

アイスランドの自然と環境を描く時、氏はすばらしい画家であります。しかし氏がみずからの主たる使命としているのはそれではありません。氏はもつとすぐれた作品の一つの中で「同情は最高の詩作の源泉である。地上のアスタ・ソリリヤによせる同情こそそれだ」と語っています。芸術は人間性に対する共感と愛によって支えられたものでなければならず、それなくしてはその価値はきわめて貧しいものとなるのであります。そしてまた、社会的な熱情がラックスネス氏の筆になるあらゆる作品を一貫して流れております。現代の社会的、政治的問題に対する氏の介入の姿勢は常に強烈なものであり、時に作品の芸術性をそこなう危険さえはらんでいるものであります。そのような場合、氏を護るものは辛辣なユーモアであり、それあるために氏は好ましくない人物さえ一種の好意の眼をもって視ることができ、また人間魂の迷路の奥の奥まで見透すことができるのであります。

ラックスネス氏の小説においてもつともわれわれをうつのは、登場する個々の人物とその運命であります。アイスランドの小さな漁村での貧しさと、闘争と、議論の暗い背景の中で、輝くばかりのサルカ・

ヴァルカの少女らしい姿は、その力強さと心の清らかさの故に際立つたものとなっているのであります。

「夏の家のビャルトゥル」の物語、「独立の民」は、さらに感動的なものでありましよう。彼は不屈な意志をもち、自由独立の情熱に燃える男であり、イエイエルの自由な自作農民に叙事詩的スケールを与えてアイスランドの背景の中にはめこんだ姿であり、開拓者であり、アイスランドの千年の歴史を築いた植民者の姿であります。ビャルトゥルは、病氣、不運、貧困、飢餓、荒れ狂う雪嵐、それに怖ろしい沼地の幽霊におびやかされながら、常に毅然として立っています。そして彼の非力と、養女アスタ・ソリリヤへの感動的な愛は誠に悲壯ともいえるものであります。

農民詩人オーラフル・リョースヴィーキングルの物語「世界の光」はおそらくもつとすぐれた作品でありましよう。これは、貧しいミリュート、美の友人であり召使いである一人の人間の清純無垢な夢とのコントラストの上に成り立った物語であります。

『アイスランドの鐘』においてラックスネス氏ははじめて舞台を過去の時代にとりましたが、この作は往時のアイスランドとデンマークの社会の空気を描いて大きな成功を収めました。スタイルから見てもこれはまさに傑作であります。しかしこの作においてさえ、読者の心に残るものは登場する人物とその運命なのであります——饑餓に苦しむイン・フレックヴィズソン、美しい娘スネーフリーズル・エイダリオン、それに教養ある写本蒐集家アルナス・アルネウス。この最後の人物の中に特に、アイスランドの魂は他の誰におけるよりも力強く生きているのであります。

ラックスネス氏は、自己の故国において広く知られ、伝統となっている基盤に向かって、自己の文学的展開を行なってきました。これは氏の一大功績であります。氏の文体は生氣あふれる独特なものであり

1 スノレというサガはないので、中世アイスランドの歴史家スノレの著とした『ヘイムスクリングラ』などを指すものだろう。

2 スウェーデンのノーベル賞作家ヘイデンスタム(一八五九—一九四〇)の作品「ハンス・アリーヌス」(一九二二)の主人公。

3 「独立の民」の主人公。

ますが、同時に読み易く、自然なものであり、その柔軟な手法によって目的がやすやすと達せられて行く様は、誠に強い感銘を与えずにはおきません。

ラックスネス氏の立場を正しく理解していただくために、強調しておきたいことがもう一つあります。一時、アイスランドの諸作家が彼らの芸術表現のために、北欧の他の言葉を使わんで使用したことがありました。これは経済的理由もありましたが、それにもまして、彼らが芸術的創造の手段としてアイスランド語に見切りをつけたことによるのであります。ハルドール・ラックスネス氏は散文の分野において、アイスランド語を、現代的内容を芸術的に表現する手段として使えるよう改造し、その実例を示すことによって、他のアイスランドの作家に母国語を使用する勇気も与えられました。大きく言えば、氏の功績はここにあるのであり、これによって氏はその故国においてあのような強固な、高い地位を獲得されたのであります。

(ここで講演者は、受賞者のほうを向き、アイスランド語で言った。) ハルドール・ラックスネス氏。

私はこの儀式に列席された方々のために、あなたの作家としての経歴を(スウェーデン語で)たどってきました。ノーベル賞を受ける人々の大部分は、この試験から免除されるのでありますが、これは、その方々がスウェーデン語を理解されず、また話される内容をも聞く必要をもたれないからであります。ところがあなたの場合はいささか趣が異なるのでありまして、都合の悪いことに、アイスランド語を解するスウェーデン人より、スウェーデン語を解するアイスランド人の方がずっと多いのであります。

しかし今や、スウェーデンにも他の国にも、ただあなたの作品を原語で読むことのみを目的としてアイスランド語を学ぶ人々がふえてきています。その数は年とともにますますふえてゆくことでしょう。あなたが今後作家としての使命の遂行を続けられ、また同時に、あなたの国の他の人々が同じ使命に加わるよう励ましを与えられることを望むものであります。

そしてわれわれに、アイスランド人の生活と、アイスランドの歴史に関する生き生きとしたイメージを数多く与えていただき、アイスラ

ンド文学の見事なる開花を見る希望を与えていただくよう望んでやみません。

スウェーデン・アカデミーを代表いたしまして、私はあなたに心からなるお祝いを申し上げたいと存じます。どうか一歩前に進み出られて、国王陛下の御手からノーベル文学賞をお受けとりくださいますようお願いいたします。

(山口琢磨訳)

受賞演説

数週間前、スウェーデン南部の地方を旅行している時に、スウェーデン・アカデミーは私を授賞者を選ばらしいという噂を耳にしました。その夜、ホテルの一室で、私は自問しました。この一人の貧しい旅人、世界でもっとも辺鄙なところにある小島から来た一人の作家にとって、文化振興の功績によって有名な一つの団体から突然えらび出され、その指示によってこのような壇の上に連れ出されるということは、いったい何を意味するのだろうか、と。

その時、私が、友人や親族、若い頃に私の仲間であり、今は他界した人々に思いをめぐらしたとしても不思議ではありません。この思い出は、この荘厳な今の時刻も続いています。それらの人々は存命中も多くの人には知られることなく、現在彼らを思い出す人はほとんどありません。それにもかかわらず、それらの人々は私を形造り、私に影響を与えてきたのでありまして、この影響たるや、世界の偉大な大作家や先駆者たちが私に与えたものより大きいのであります。私は今、これらのすばらしい人々、私がその間で育ったその人々のことを思い出します。私の父、母、なかならず、アルファベットを習う前から古代アイスランド文学の何百というすじを私に教えてくれた祖母のことを思い出すのであります。

その晩、ホテルの一室で、私は祖母が私に植えつけた道徳律というものを思い出しました——生き物を殺したり傷つけたりしてはいけません。この世の中で貧しい人々や、しいたげられた人々を大切にしないさい。軽蔑され、無視された人や、不正に苦しむ人のことを忘れてはなりません。なぜなら、アイスランドであろうと他の場所であろうとを問わず、私達の愛と尊敬に値するのはそういう人々であるからです……。私が子供時代をすごした環境は、地上の強大な力というものは

物語や夢の外には存在しないといった類のものでした。日々のつましい生活と、それから生まれてくるものへの愛と尊敬、といったものが、私が子供時代に肯定できる唯一の道徳律でありました。

私はまた、世の中にまったく名は知られず、しかも私の若い時代からずっと年をとるまで私の作家生活を導いてくれた友人たちを思い出します。彼らは作家ではありませんでしたが、実に誤りのない文学的判断をもっていて、文学において最も本質的なものに対して私の眼を開かせるについては、多くの大作家をしのぐものがありました。これらの豊かな天分をもった人々は、もうこの世にはおりませんが、私の心の中には今も生き生きとしていますので、どれが私自身の表現で、どれが私の中にある友人の声であるか、区別がつかなくなることもしばしばあります。

私はまた、十五万の男女からなるあの一つの共同社会に思いをさせています。それはアイスランド人という文学を好む民族であります。私の国の人々は、私が文学活動を始めた最初の段階から私の仕事につき従ってきてくれました。今では、私の作品を批評し、賞讃してくれていますが、それでも単語の一つさえ見過ごすことはありません。すべての音を記録する鋭敏な機械のように、この人々は、私の書く一語一語に、時に好感をもつて、時に不快感をもつて反応を示しました。このような何世紀にもわたる詩と文学の伝統に染みついた民族の中に生まれてくるとは、作家というものにとってはまたとない幸運であります。

私は、私たちの古典を造り上げた古代アイスランドの物語作家たちに想いをさせています。この人々は民衆とまったく一体となった存在だったので、彼らの名前は後世に伝えられることなく、作品のみが残ることになったのであります。彼らはその不滅の作品の中に生きていくのであり、アイスランドの風物と同じく、この国の一部であります。暗黒の幾世紀にもわたって、これらの名もなき男女の語り手は彼らの土でかためたあばら屋で、報酬も、名誉も、またそれが世に認められるかどうかとも気に掛けることなく、営々として物語を書いていたのであります。その貧しい家には、夜ごと書きものをするためにかじかんた指を温める火もなかったであります。それにもかかわらず彼らは、文学用語としてもっとも美しく巧みなことばを創造し得たの